慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	お大名の話, 三田村鳶魚著
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.2 (1924. 8) ,p.172(333)- 174(335)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240800-0172

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

來るべき武家時代の先驅を爲した意味に於て確に當代の巨人であつたのであると結んでゐる。

第四編に於て氏は疑門の人物とされてゐる秀郷を研究し彼の本據を今の阿蘇郡田沼とし彼と藤原氏の關係は夙に本家領家の關係を結んでゐたとし特に彼が下野守に任ぜられた事を以て歴史の大勢上重大なる意味あることを述べ、一般に信ぜられてゐる將門秀郷會見の傳說は鎌倉武人の具體的理想を示したものであり、又龍宮物語は京人の空想的感情を示すものと爲してゐる、第五編は坂東武者忠常と題して長元の亂の研究を爲してゐる、此編に於て氏は忠常亂は天慶の亂の繼續又は再起であるとなし、將門後常陸の平氏と房總の平氏との間に永い間の確執が繼續されてゐたことを述べ、平直方をして忠常の亂を鎭定させ樣としたのは丁度仇敵を以て追討使と爲した樣なものであるが源頼信が追討使に任ぜられた時は忠常等との間に何か理解があつたに違ひないと斷ぜられてゐる。以上の推測が全く事實として認め得べきや否やは別としても此等獨特の見解を立てた氏の觀察が如何に鋭敏であるかを知られるのである。

著者は其自序に於て言はれてゐる如く本書は織田完之氏に負ふ所が多い樣であり、又將門辯護に傾いてゐると思はるゝ點もある樣である、然し將門と牧場の關係、藤氏と將門との關係、推問東國使任命の顚末等を始めとして我々の啓發さるゝ所が非常に多いのである、總ての歴史がその研究者の主觀を通じて書かれたものである以上それに絶體公平を要求することは無意味のことであり不可能なことである、氏が少しく將門辯護に傾いたとしても之を攻むるはもとより不當のことでなければならない、兎に角、氏の如き特殊な熱心なる研究者に依て將門の眞想が十分に明白にさるゝに至つたことは喜ぶべきことである。

（今宮　新）

お大名の話（三田村鳶魚著　雄山閣發行）

江戸時代の研究者として知らる鳶魚三田村玄龍氏は震災後「お大名の話」と題する一書を公にせられた。其の「はしがき」に左の如く本書を說明して居る。

あまり難解らしくも思はれて居ない諸侯の生活、一口に大名ぐらしと云つて了つて、說明さへも必要とされて居らぬ、其の大名ぐらし程、今日の世間に間違へられて居るものは尠からうとも考へられる。我等が知つて居る諸侯の世活と、世間で云ひ囃す所とだけでも、大分な差違がある、しかし我等の知つて居る所が精確であるのか、ないのか、或は世間に知れて居る方が間違ひでないのかも知れない。兎に角差違のあるだけは慥だ、さうして其の差違は二三者の書いた脚本について目立つて見へた、それのみならず大方の敎を受けたい望があるので、今爰に大名に關する記述の一部分を、公刊することにした。其の一部分といふものが、偶然に奥向即ち家庭の事柄が多く、妻妾との關係を反覆するものであつた、從つて奥方の更年制だとか、避姙だとか云ふことを絮說するものであつた。

本書は「お藤は烈女か」外十二の題目のもとに記述せられてゐる。次に其各々に就いて其の大要を錄する事にする。

お藤は烈女か――水野の天保改革の節其の片腕とたのまれた家慶將軍の御側御用人、信州飯田の城主堀大和守親審家に於て、天保十年九月三日其の嬖妾兼御年寄たる老女若山を斬り「信濃なる山路の雪ともろともに春をも待たできゆる今日哉」の辭世を殘して刑場の露と消えた「ふじ」の生涯と、其の當時に於ける堀家の內幕を主として記述したものである。猶安井息軒の阿藤傳を「息軒先生が勘違をした根本は別にあるのだが、大體は飯田忠婦傳といふ作者不明な寫本の記載を鵜呑みにしたから……息軒先生が豐浦を奸物と速斷したのも、ふじを烈女と飲込んだのも、本はと云へば嬖妾兼御年寄といふ、江戸時代の大名生活に類例のない話から起つた勘違ひである。」又「藤本藤陰氏は藤の一本や烈女お藤を書いて飯田忠婦傳の嫡孫になり濟し盛に息軒先生の上塗を遣つた。」と藤陰の著を評して居る。鳶魚氏の說に據る刄傷の原因は甚だ曖昧であるが、お家の爲めを思ふにあらずして寧ろ私怨の爲で、加ふるに若山の閨敵お糸の方の敎唆若しくは指嗾したかも知れないと云ふのである。要するにふじは烈女にあらずとの結論である。

疑問の佐倉惣吾――義民中佐倉惣吾郎の名高のは決して其の優先者又は親子五人の壯烈の死のためにあらずして三枚橋下の將軍直訴といふ事であるまいか。然しこの直訴が甚だ曖昧である。江戸時代を通じて將軍のお通りの時橋の下にかくれ者のあつた事實は天保元年十二月六日世子家慶の船路を千住から歸る時、大川橋の梁間に狂言的身投の時を待つため潛伏して居つた幾太郎一人である。惣吾の直訴したと云ふ承應元年十二月二十日東叡山御廟參は保科肥後守正之の代參である。それ故「三枚橋も御廟所もあつたものではない。將軍に直奏といふことが明白に虛誕である、一體惣吾譚に何程の史實を認められ何程の(鹵莽)が包容されて居るのか。」惣吾の事蹟を記したもので一番古いものとしては地藏堂通夜物語であるが、百年の後作られた實錄體小說で、其れには芝居で有名渡船渡守甚兵衞の名も見え無いのである。我等が彼の實在を否定しないのは只だ將門山の口明神の奉祀に由來するのであると記してある。

涼しがる御大名――小便組――この二は鳶魚氏特意抱の腹絕倒の珍談で詳細はお預りとして本書に讓る事にする。

サンガー色を帶びた大名の家庭――サンガー婆子の家苞に――この二はサンガー夫人の來朝によつて始めて產兒制限の必要を感じた男女の必讀の處である。其の方法こそ相違があらふが、我が國にも立派に其の制限は行れて居たのである。庶民は勿論、大名の家庭や將軍の大奧に於ても盛に行はれて居つたのである。

變造護國大平記――即ち柳澤騷動で正月歌舞伎座で興行されたものであるが、鳶魚氏はこれを評して「何にせよ歌右衞門芝居の事ゆゑ、それに都合の好い處を擇み、それに勝手の好いやうに脚色されて居る。我等は時代物を書くには時代の諒解がなければならぬと思ふ。時代錯誤以上に時代を超越して居るのを見るに忍び

ない……」

開演を見合せた「井伊大老の死」――蘇生した井伊劇――これは種々世評のあつた有名な芝居であるが、其の鳶魚氏の劇評は是非一讀の價値がある。

譫語をいふ伊達安藝――帝國劇場の千姫――この二者も劇評であるが、前者の評の終に「囈語劇の科白は指摘するにも容易でない。それに着付や髷又や道具が時代飛び越し若しくは時代交雜であるが、先づ最急なのは筋の夢幻的なのを匡正することであらう。」

又後者の序幕千代田城紅葉山花見場に於て「全體紅葉山は何時築造されたのであるか、その答按で直ぐに此の場が壞れる。千姫樣の頃には未だ紅葉山は出來て居ない、……女儀は御台所でも紅葉山參詣を許されなかつた程、神聖嚴重な地域になつて居た」。と記してある。以上の諸評中には自分も同感の處が多い。

貸本屋と御家騷動――蜂須賀家に關する阿淡夢物語の例を引いて、「幕府の處分に依つて始めて話の種子を撒くのでなく、苟くも世間の視聽を惹くやうなことがあれば、大急ぎで寫本を製造したことに感服させられるではないか、貸本屋が如何に新材料に忙しく、新しい話の供給に勉めたかは實に今人の意料の外である。」と貸本屋講談師の迅速な事に就いて記してある。

大奥の煤掃――綿繪で見る樣な頓興なもので無く、又千代田の大奥や、德川の大奥や、大奥の女中の記す樣なもので無い事を證するため一老女からの實談を記述したものである。

以上は本書の大要であるが、要するに鳶魚氏獨特の筆法を以て、江戸時代の大名生活を記述したものであるから、同時代の研究者は勿論觀劇に興味を持つ人に必讀を勸むるのである。

（大正十三年正月七日　武田勝藏記）

國幣中社　中山神社資料（藤卷正之編）

本書は岡山縣（美作國）苫田郡一宮村大字一宮字長良嶽に鎭座する、美作國一宮たりし中山神社の資料を文書記錄等より蒐集したるものにして、附錄を加へて約七百頁、外に十數の寫眞繪圖等を挿み、當社の宮司藤卷正之氏の大正四年御即位奉祝記念の爲め且つ大正十一年本殿修理落成記念の爲めに編纂せられたるものである。

この本文に收むる處のものは、當社の所在、社名、祭神、鎭座神體、社傳沿革、社殿構造、社地、神階、社格、社領、祭祀、奉幣、祈請、神異、寄進、寶物、攝社、神職及荷前祭主附社僧、氏子及講社、名所附詩歌、雜載にして、附錄は大正十一年四月本殿修理竣工に關する「大正營繕記錄」である。次に本書に據りて當社の大要を錄し參考に供する事とする。

當社は美作國の一宮にして、苫田郡一宮村に鎭座し、中山大神宮、中山大明神とも稱し、祭神は金山彥命に座す、されど古來大巳貴命、鏡作尊、石凝姥尊即鏡作尊、石凝姥命、天糠戸命鏡作尊鏡作尊即金山彥命、吉備武彥命、天鏡尊、中山祇神等の諸說あるも社傳に據れば、鏡作命を主神とし、大巳貴命、邇々杵を配祀する